

アルザス学事始

宇 京 頼 三

要旨 アルザスはライン川を挟んでドイツと国境を接するフランスの最北東部にある小さな地方である。しかし、この地方はその地理的な位置のために、古来からゲルマンとラテンのヨーロッパ二大文明が衝突を繰り返してきた“文明の十字路”であった。そして有史以前からケルト、ラテン、ゲルマン、ユダヤなどの諸民族が入り混り、闘争し、西ヨーロッパ世界の形成に深く関与してきた。こうした歴史の激動に揉まれながら、アルザスはその特異な歴史的文化的言語的心理的二重構造を生み、ヨーロッパの精神世界にそれなりの役割を果たしていた。然るに、この小国の真の姿は我が国はおろか、パリやベルリンでさえもよく知られていないとは言えず、常に辺境の地、或いは外国の地と見なされてきたのである。

本稿では、こうした点を踏まえつつ、アルザス学基本の書、F. Hoffet : *Psychanalyse de l'Alsace* を手掛りにして、まず、1. 「アルザス素描」では、この国境の地が置かれた歴史的状況を今の姿と絡ませつつ概観した。2. 「ハンス・イム・シュノーケロッホ」では、この古謡がアルザスの複雑な二重性を如何に象徴しているかを検討した。3. 「アルザスという名称の起源」では、この語の由来を紹介するとともにアルザスの言語事情にも若干言及した。

以上、アルザスを特徴づける幾つかの基本的事実を呈示し、吟味することにより、私の「アルザス学事始」とした次第である。

遅れてきたmoliéristeを自認していた私の手元へ、間接的ルートを介して、ベルリン自由大学英文学教授、インゴ・ポンメレニング氏から、Frédéric Hoffet : *Psychanalyse de l'Alsace* の初版本(1951年版)のコピーが送られてきたのは、1986年2月上旬であった。アルザス問題など私には思いもよらぬことで、この特殊な地域の事象など、どこか遠い国のことでしかなかった。しかし、この polémique にしてかつ agressif な啓発の書を一読するや、自らの無知を思い知らされた。まさに青天の霹靂 coup de foudre であり、まるで脳天を打ち碎かれたかの如くであった。自らの不勉強を差し引いても、このアルザス学 l'Alsatique の基本の書には未知のことが多すぎた。かくして、私はしばしモリエールを離れ、ヴォージュ山嶺を越えてアルザスの地を探索して見ようと決意したのである。以下、前記フレデリック・オッフエの『アルザスの精神分析』を中心に、アルザスを特徴づける幾つかの事実について検討して見たい。

1. アルザス素描

まずアルザスの地理的位置を明確にしておこう。この地方は東部をライン川、西部をヴォージュ山嶺に挟まれ、南部にジュラの支脈を控えて南北に細長く、長方形状に伸びるドイツ国境沿いのフランス最北東部にあり、最南部の一部はスイスとも国境を接している。現在は北部をバ・ラン Bas-Rhin、南部をオ・ラン Haut-Rhin 県と呼ぶ。フランス大革命時の1790

年に制定されたこの両県が、セレスト、コルマルの間に境界にしてアルザスを二分している。この境界線は二つの伯爵領 Landgrafschaft=comtéがあったとされる古来から、大きな変化は殆どなく今日に至っている。1985年現在のアルザス人口は156万人である。⁽¹⁾

ところで、人はアルザスと聞かれて、一体何を想像するであろうか？おそらく我々が真っ先に思い浮べるのは、例のA・ドーデの『最後の授業』の愛国的場面の描写かも知れない。しかし、あのアメル先生の「フランスばんざい！」については、既にして田中克彦氏がその偽瞞性を指摘している。⁽²⁾ またわがアルザス学基本の書には、この南仏生れの作家のことなどただの一度も出てこない。問題外なのである。一部の人々を除いて、我々の殆どすべてのアルザス観は、「この問題外の水準」の域にあると言っても過言ではあるまい。たとえば、古来、南北約200キロメートル、東西約40～45キロメートルの小さな広がりすぎぬこの地方が、ヨーロッパ大陸西部のほぼ中心部に位置していたばかりに、如何にして戦場の巷と化して今日に至ったか、十分知られているとは、残念ながら言えない。アルザスの真の姿を知るには、あの間柱を見せる独特の木造りの家 maison en colombe を眺め、ハムとソーセージ、シュクルット Choucroute を肴に美味なアルザスワインを味わうだけでは不十分なのである。それにはまず、次のような事実を念頭におかななくてはならないであろう。

「…歴史はアルザスをヨーロッパの戦場と化した。この地方では大昔から戦争が相次いで起った。ローマ人はここでゲルマン部族と戦った。ゲルマン人は、アッティラがここに定住し、フランスへの侵略を開始するようになるまで、部族間で抗争した。中世はこの国を相分った領主間の絶えざる戦闘の痕跡を残した。宗教改革の分裂後、今度は三十年戦争だった。つまり、スウェーデン人がアルザス平原に野営地を築き、神聖ローマ帝国軍がフランス人とここで会戦した。結局、ルイ14世がこの地を奪取した。しかし、戦闘の時代はそれでも終らなかった。フランス革命が新たな侵略を招来し、ナポレオン戦争がこれに続いた。1870年、アルザスは流血の戦闘の舞台になった。1914年、人々はヴォージュの山嶺で戦った。最後に、前大戦では、ライン川沿いに何度となく戦闘が繰り広げられた。⁽³⁾」

攻囲が攻囲に、戦闘が戦闘に相次ぎ、略奪、爆撃、廃墟のないアルザスの町はないと言われる。またその主要な都市は殆どが要塞化されているという。J. J. アット氏も同じく言う。「アルザスは常に戦場であり、民族と国家が激しく争い、常に戦闘の矢面に立たされた。アルザス住民に染みついた、厄災、破壊、占領、抑圧の長い習慣から、防衛、保存本能の自然な発現形態でしかないあの連邦分立主義 particularisme、あの保守主義、あの伝統主義が生れたのである。⁽⁴⁾」そこには、単にライン川を挟んでゲルマン文明とラテン文明が衝突したということだけでは片付けられない、重い歴史的現実とその重圧に喘いだ人間存在があったのである。まさしく、この地は兵士の通り道であった。そしてその度に苦しめられたのはアルザス民衆であった。勿論、平和時にはアルザスがやはりヨーロッパの十字路としての役割を果たし、文明の恩恵を受けたのも一方の事実であるが。

戦争には勝者の強制、敗者の屈従が常に付きまとう。アルザス人はその都度勝者に属したかも知れないが、実際には敗者の側にもあったのである。アルザスの帰属する国家が変わる度に、変更されたのは政治的社会的制度だけではなく、宗教、言語などの文化的精神的領域にまで及んだのである。しかも文明の十字路アルザスでは、それが一度や二度では済まなかった。1648年にフランスに併合されるまでは、神聖ローマ帝国、つまりドイツ領であった(完全にフランス王国に併合されたのは1681年であるが)⁽⁵⁾。1870年、普仏戦争後、フランクフルト

条約で再びドイツに帰属した。そして第一次大戦後の1918年にフランス、ヒトラーの登場とともに1940年にドイツ、第二次大戦後1945年にフランスに再々併合され、今日に至っている。四分の三世紀の間に4度も支配国家が変わったところが、アルザス以外のどこにあるだろうか？ 寡聞にして知らない。

それ故、1870年以前出生の人が第二次大戦後にも生きていたとすれば、5度国籍を変えたことになる。そうしたアルザス人がげんにいたのである。しかもその間、ドイツ、フランスの両国家は勝者となると常に相手民族の追放、肅清政策をとった。フランス側で言えば、独軍協力者裁判法廷 *Cour de Justice*, 特別公民裁判所 *Chambres civiles*, 特別軍事法廷 *Cours martiales*, 人種判別特別法廷 *Commissions de triage* などの特別裁判所の設置がその証拠であり、ドイツ側にも同様のものがあったという。独、仏両国家から相次いで、強制退去、追放処分にあった人々がアルザスには多数いたのである。また体制が変わる毎に街や通りの名前も変わった。例えば、1870年以前はナポレオン大通りであった道路が、普仏戦争でヴィルヘルム1世通りとなり、1918年には共和国大通り、1940年にはアドルフ・ヒトラー通り、最後はシャルル・ド・ゴール大通りになった。アルザスに多い將軍の記念彫像も戦争の度に取り替えられた。そのあまりの目まぐるしさに、あるアルザス人が彫像の首を替えるだけですむように、首を貯蔵する記念碑部品保管倉庫を作することを提案したという、笑うに笑えないブラックユーモア的な茶番もある。ところが、それがアルザスの人々にとっては日常茶飯事だったのである。

確かに、何千年もの人類の歴史のうち、部族、民族の係争の地となった国や地方は世界中至る所にあったし、今もある。何もアルザスが特別なのではない。バスク地方、コルシカ島、カタロニア、北アイルランド、トリエステ、ズデーテン、バルト海、マケドニア地方など枚挙に暇がない。また第二次大戦後だけでも、東西両ドイツ、分断された朝鮮半島、ベトナム戦争、アフガニスタン問題、アフリカ大陸の部族、人種の争いなど、民族、国家間の紛争事は絶えることがない。しかし、こうした事実を踏まえた上で、なおかつアルザスがある特殊性なり、独自性なりを有するのは、それはF. オッフエも言うように、この地がヨーロッパの二大文明が激突、交流する地点であったからである。単にラテン民族とゲルマン民族、後のフランスとドイツの軍事的境界線だけではないのである。

戦後40年を経て、かつて独仏間にあって複雑な様相を呈していた戦前の自治運動 *autonomie* の声はもはや聞かれなくなり、アルザスはフランス共同体の懷に包まれ、今は平和を享受している。J. リテールが指摘するように、「アルザスはヨーロッパの橋渡し役を果しながら、1950年代半ばから他の地方を羨ませるほどの繁栄と成長を経験した」⁽⁷⁾ かもしれない。なるほど、戦後、アルザスは工業化が進み、経済が発展し、それとともに除々にではあるが、ぶどう栽培を中心に農業が集約化、近代化されたのも事実である。その結果、アルザス全体の都市化が促進され、ストラスブール、ミュルーズ、ライン川沿岸などを中心に人口の集中化が生じ、社会的環境にも変化が起った(もっとも、人口の都市集中と言っても、ストラスブール38万人、ミュルーズ35万人である)。鉄道の電化、ストラスブール-ミュルーズ間の快速鉄道『*Métrasce*』の創設、ライン川を中心に運河で結ばれた水路網の近代化、フランス東部、南東部のフランス側高速道路に通じ、ストラスブールとミュルーズでハンプルク-フランクフルト-バーゼル間のドイツ高速道路軸に繋がって、イタリアにまで連絡する道路網の近代化、空路連絡網の整備などがそうである。アルザスはその相貌を変えたのである。別な

理由からであるが、アルザスに幸福をもたらす島として親しまれるこのとりが激減した⁽⁸⁾というが、これもそうした近代化によってもたらされた環境変化の象徴であろう。

こうしたアルザスの都市化の進展とともにどこでもよくあるように、生活や思考様式の単一化が生じたが、それはアルザスの独自性の一端を喪失させるものでもあった。またあれほど長くアルザスを支配してきた宗教界の力も弱まり、フランス語の地歩が日毎に増し、今やアルザス人の大きな言語的ハンディキャップもかなり減少した。そしてアルザスに多くの支持者を得たヨーロッパ精神の進展が積年の独仏間の対立心を薄め、オッフエが分析したようなアルザス人のあの劣等コンプレックス的状况は消滅したかもしれない。しかし、それでもやはりアルザスの苦渋に満ちた歴史的現実はそのたやすく消えるものではない。F. リュイリエが懸念したように⁽⁹⁾、現代アルザスの心理的現実が明日、或いは明後日、再び問題になることはない⁽¹⁰⁾と誰にも保証はできない。動乱に満ちた長いアルザスの歴史からすれば、平和な40年や50年など短いものである。げんに、1981年秋には地方分権主義の高まりもあってか、アルザス人の文化的権利の認知を求める地方大会が開かれ、左翼政党や労働組合、ルネ・シッケレ協会やアルザスの文化自主管理連合などが、共同宣言を採択した。そしてそれは1982年初頭、保守派が多数の両県議会でも満場一致で認められた。即ち、フランス語同様、アルザス方言と標準ドイツ語を公認すること、小学校入学時からのドイツ語教育の実施、母語での幼稚園児の受入れ、全就学期間中のアルザス文化の教育、真の二ヶ国使用の堅持などの要求である。

このように、ことばを中心にした要求は何も今に始まったことではなく、アルザス人が自己の主体性 *identité* を擁護する時には必ず浮上する、言わば定数的な問題 *permanence* である。F. オッフエが死(1969)の直前に残した『アルザスの精神分析』の第二版(1973)のための序文の短い草稿で、初版3万部を出した後、第二版を出すに当たって、自らの言が正鵠を得たことを自負しつつ、いみじくも述べている。「おそらくアルザス問題はもう昔のような形態では存在しないであろう。もうそのことを国民の間で議論することもない。然しながら、政治の彼方で、また言うならば政治の此方で、なお多くの問題が起っている。それはことばに凝縮されている。つまり、ことばはアルザス生活の軌跡だからである。」⁽¹⁰⁾ 確かに、アルザスにおけることばの問題は宗教問題とも絡まって、極めて複雑多岐な様相を呈し、一筋縄ではいかない。これについては後にその一端を若干述べるが、詳細は他日に譲りたい。

ともあれ、前述した近代化により、今のアルザスがかつての風景を変え、ライン-ローヌや、ライン-マルヌの大運河とともに、石油パイプラインが南北に走り、ガス導管がこれと交差し、近代的な河川交通路となったライン川沿いには石油製練所、原子力発電所の近代的景観が偉容を誇り、ストラスブールにはヨーロッパ共同体の代表機関が陣取っている。そして今のアルザスの人々はこうした近代化された都市風景の下で、オッフエが分析したようなアルザスの二重性を時代遅れと断ずるかもしれない。少なくとも表面上はそのようなものは今日消滅したときっぱり否定するであろう。しかし、人は誰しもその肉体的精神的原形質をそう簡単に捨て去ることはできないはずである。アルザス人という存在には、遙か久遠の有史以前のケルト民族、ラテン民族、この両者が融合したガロ・ロマン族、またおそらくライン川沿岸に古くから住みついていたと思われるユダヤ民族の血が混り、そしてこの上にゲルマン的基本形質が形成され、更にフランス的感性の上部形質が緊密に接木され、これらすべてが長い年月を経て濃密に混淆されている。この多重構造は平和時には潜伏していても、危

機の時にはいつも表面化する、言わばアルザス人の本質を成すものである。従って、私には、オッフエが言う二重性 *dualité* よりも、多重性 *pluralité* とでも言うべきものが、アルザスの存在の根底にあるように思われる。ともあれ、こうした原形質を構成したアルザスの歴史的、民族的、宗教的、言語的多重性 *pluralité* を象徴するのが、以下に検討する、「ハンス・イム・シュノーケロッホ」である。

2. 「ハンス・イム・シュノーケロッホ」 “Hans im Schnôkeloch”

イ). Der Hans im Schnakenloch hat alles, was er will.
Und was er will, das hat er nicht,
und was er hat, das will er nicht;
der Hans im Schnakenloch hat alles, was er will.

ロ). D'r Hâns im Schnôkeloch het âlles wàs 'r will.
Un wàs 'r will, des het 'r nit,
un wàs 'r het, des will 'r nit.
D'r Hâns im Schnôkeloch het âlles wàs 'r will.

ハ). Jean dans son trou de moustiques a tout ce qu'il veut.
Et ce qu'il a, il ne veut pas,
Et ce qu'il veut, il ne l'a pas.
Jean dans son trou de moustiques a tout ce qu'il veut.

(かがんぼの穴のハンスには欲しいもの何でもある。
なのにあるものが、彼には欲しくはない。
なのに欲しいものが、彼にはない。
かがんぼの穴のハンスには欲しいもの何でもある。)

奇妙な歌詞をもつこの歌はストラスプールの古謡である。イ)は標準ドイツ語、ロ)はアルザス方言、ハ)はそのフランス語訳である。かがんぼの穴のジャン Jean dans son trou de moustiques には Jean du Nid aux Cousins の訳語もある。この “Hans im Schnôkeloch” とは一体何を意味するのであろうか？

Schnôke とは標準ドイツ語 Schnake がアルザス方言風に訛ったもので、かがんぼ(蚊ケ母)という昆虫のことである。loch は穴、巣穴を意味する。また Schnake には蛇、気紛れ、冗談という意味もあり、実には示唆的である。何故なら、このアルザス人の“国歌”とも言うべき歌のヒーローたる Hans はとてつもなく気紛れだからである。

ジャン・バチスト・ヴェッケルランの『アルザス歌謡』の序論を書いたりシャル・シュナイダーによれば、シュノーケロッホとは、本来ストラスプールの近郊の宿屋 auberge の名前であり、人々が散歩に訪れる所であった。

ストラスブール市街のヴォーバン¹の城壁の西に緑の一画があり、プルシェック le Preuscheck と呼ばれていた。『独和大辞典』(小学館)によれば、Preuße(プロイセン人)は古代プロイセン方言ではprusis, 古高ドイツ語ではPruzzi, 更にリトアニア語ではprutといい、海 Meer, 池 Teich を意味し、Scheck は斑のある雄の家畜とある。従って、le Preuscheck とは斑状に小川が流れる湿地帯というほどの意味であろう。というのは、この低地帯には、ラ・ブリュシュ川が網目状の小川となって流れ、町の入口の所でイル川に合流しているからである。la Bruche とは豆象虫の謂である。因みに、イル川はアルザス側のジュラ山脈に端を発し、アルトキルシュ、ミュルーズ、コルマール、セレストア²を通して、ストラスブールの町中を流れ、更に北上してライン川に合流する全長208キロメートルの川である。この湿地帯区域は長らく人の住まぬ沼沢の多い所で、文字通り格好の蚊の棲息地であった。ところが、中世の頃からこの周辺に酒場 guinguettes ができ、町からくる散歩者や酔客を集めるようになり、今でもその幾つかが残存しているという。

更に時代が下り、この界隈を流れる水路の一つの岸辺に水車小屋が建ち、その側に“シュノーケロッホ”という看板を掲げた宿屋が付け足されたのは1588年であった。今でもこの名はストラスブール郊外南西部にシュノーケロッホ通り Rue du Schnôkeloch として残っている。

18世紀の終り頃、この宿屋は大変な評判を呼んでいた。そしてこの辺りの土地を取得した人々、特にストラスブールの新教社会事業婦人会などの手により、この周辺一帯の沼沢地 ried が次第に公園として整備されていった。19世紀になって、富裕な地主たちがここに豪邸を建て始めても、人々は相変わらず“シュノーケロッホ”に憩を求めにやってきた。宿の主人ハンス某が自慢の料理で大好評を博していたからである。

あるおどけた学生か、店の食事に不満を持ったひねくれ者の客の一人かが、“シュノーケロッホ”の主³に、アルザス食通名士会の殿堂入りを勧めた。そこでこの頃、名なしのシャンソニエ^{オリジナル}が即興的に作って歌われ出したのが、以下に掲げる前記の歌の元歌である。

(アルザス方言)

D'r Hâns im Schnôkeloch het âlles, wàs m'r will,
Un wàs 'r het, des will m'r nit
Un wàs m'r will, des het 'r nit.
D'r Hâns im Schnôkeloch het âlles, wàs m'r will.

(フランス語訳)

Jean du Schnôkeloch a tout ce qu'on désire,
-mais il offre tout ce qu'on ne veut pas
-et n'offre pas ce qu'on veut.
Jean du Schnôkeloch a tout ce qu'on désire,

(シュノーケロッホのハンスには客の望むもの何でもある。
なのに客の欲しがらぬものばかり出し、
客の欲しがるものをさきぬとき。
シュノーケロッホのハンスには客の望むもの何でもある。)

歌のメロディーは多くのヴァリエントが今日まで伝わっている古いダンス曲だという。バーゼル出身のさるドイツ系スイス人女性によれば、子供の頃口ずさんでいたそうであるから、アルザス周辺を含めて相当ポピュラーなものであったと思われる。

酒場“シュノーケロッホ”はこの親愛なるハンス氏の死後もなお久しくその評判を保った。歌もまた、歌われた当人よりも長生きして、色々と変化した。そして有名、無名の作者たちが色々とアレンジして、新しい歌詞を生み出した。その中の一人にアドルフ・シュテーバー Adolphe Stöber (1810-1892) がいる。エロス・ヴィカリの『アルザス文学史』⁽¹²⁾によれば、彼がアルザス方言で書いた詩“Hans im Schnökeloch”はアルザスで有名になり、以後ハンスはアルザスの魂を表象する寓意的人物となったという。つまり、酒場の亭主ハンスが民衆の戯れ歌の主人公として面白半分に歌われているうちに、遂には、優れた叙情詩人の手により比喩的な存在に変貌したのである。この頃から永遠に満されざる者ハンス un éternel insatisfait という、言わばアルザスのアンチ・ヒーローの新たな神話が誕生したのであろう。

前述したように、この歌には様々な替え歌がある。たとえば、ハンスの妻君を暗示したと思われるヴァリエントがある。以下の引用歌については、アルザス方言とその仏語訳は省略する。

《彼には申し分のない女房があり、よき日にも悪き日にも忠実だ。
世間にはないほど貞淑だ。
なのに亭主はその値打ちが分らない。
しまいには、家に放ったらかし、悶死させたとき。》

《彼には忠実で善良な女房がある。
なのにそれを信心深すぎて、
ほんとの馬鹿だと思ふ始末。
もっと賢く喋るほかの女房が欲しいとき。》

こうした調子で、召使、女中、家、田畑、家畜、果ては墓さえも替え歌にして、へぼ詩人たちが安上がりユーモアを楽しんだのであろう。しかし、次のような元歌に忠実なものもある。

《シュノーケロッホのハンスはどこへでも行く。
今いる所にはとどまらず、
とどまる所は気に入らぬ。
シュノーケロッホのハンスはどこへでも行く。》

このような替え歌の中で、次のヴァリエントは第二次大戦中のナチ占領下で大当たりを取り、大胆にも歌そのものが戦時の戒めの役割りを果たしたという。おそらく絶対的なヒトラー体制の下、アルザス人は行方定まらぬわが身を嘆いて、ハンスに自らを託し、暗いユーモアの裡に無言の抵抗を秘めて、口ずさんだのであろう。

D'r Hàns im Schnôkeloch sâât âlles, wâs er will.
Un wâs er sâât, des denkt'r nit,
Un wâs er denkt, des sâât'r nit.
D'r Hàns im Schnôkeloch sâât âlles, wâs er will.

Jean du Schnôkeloch dit tout ce qu'il veut.
Il ne dit pas ce qu'il pense,
Et il ne pense pas ce qu'il dit.
Jean du Schnôkeloch dit tout ce qu'il veut.

(シュノーケロッホのハンスは言いたいこと何でも言う。
心に思っていることは言わないし、
言ってることを思っているのでもない。
シュノーケロッホのハンスは言いたいこと何でも言う。)

ところで、このアルザスの国民歌謡は一般民衆だけではなく、数多くの芸術家たちに感化を与えた。前記シュテーバーは一篇の詩を、フェルディナン・バスティアン Ferdinand Bastian は戯曲を(1903)、ルネ・シッケレ René Schickelé はドラマを(1915) ハンスに捧げた。また画家たちも一世紀近くの間この有名な主人公を描き続けた。テオフィール・シューラー Théophile Schuler (1859), E. マチス E. Mathis (1860), エミール・シュヴァイツァー Emile Schweitzer (1862), シャルル・スパンドレール Charles Spindler (1920年頃), リュシアン・アッフェン Lucien Haffen (1930年頃) などがそうである。更にこの歌のメロディーも、多くの曲やアレンジ曲に挿入されているという。

しかし、こうした芸術家たちの中で特筆すべきは R・シッケレの場合であろう。自ら「フランス市民にしてドイツの詩人 Citoyen français und deutscher Dichter」と定義したこの作家は、1883年、アルザスはバ・ラン県のオーベルネに生まれ、ナチの手を逃れて移住した南フランスのヴァンスで、1940年に客死した。彼の父親はドイツ人、母親はフランス人で、少年シッケレはギムナジウムに上がる頃まで、ドイツ語もアルザス方言も知らない母の言語フランス語で育った。同じような事例はアルザス人にはよくあることで、シッケレもドイツ語を獲得言語、言わばある種の強制として修得した。勿論、この反対の事例もあり、それは人と時代によって異なる。彼は長じて、ドイツ語表記の作家になるが、終生、ドイツとフランスの文化の和合を目ざし、その遭遇の地を、自らの故国アルザスと思い定めていた。

彼の代表作の一つ、『ハンス・イム・シュナーケロッホ』は1914年末に書かれ、戦争中も、軍事当局が禁止するまで、ドイツの舞台で何度か上演されていた。フランスでは、この作品はドイツのプロパガンダと考えられた。シッケレの全作品がドイツでは禁書とされ、後のナチ政府にはその悉くが焚書処分に付されたというのに！そして更に驚きなのは、このドラマがアルザスで初演されたのは、やっと5年前、1982年のことであった！因みに、日本は勿論、ドイツのオーソドックスな文学史でも R・シッケレが取り上げられることは殆どないようである。⁽¹³⁾

前出 E・ヴィカリ『アルザス文学史』の梗概によれば、⁽¹⁴⁾ このドラマの主人公ハンスはドイ

ツ人を父とし、フランス人を母とし、二つの国のどちらにも、同じ愛着を覚えていた。戦争が起ると、弟のバルタザールはドイツ軍に入るが、ハンスは結局フランス軍に入隊したとある。これはアルザスでは実際によくあることで、F. オッフエがその具体的な事例を幾つか上げている。¹⁵⁹ ドラマでは第一次大戦前夜に関する別なテーマが導入されるが、作者はまた主人公ハンスを通して、不安定で常に満たされないアルザス人の性格の一面を示そうとしたのであろう。そして注目すべきは、ハンスが作者シッケレという極めてアルザス的な存在を体现し、しかもなおこのハンス＝シッケレという比喩的存在が数奇な運命を辿ってきたアルザスを象徴していることである。まさしく、シッケレ自らが言ったように、「わが出自がわが運命なり *Meine Herkunft ist mein Schicksal*＝*Mon origine est mon destin*」なのであった。

さて、アルザス人の“ラ・マルセイエーズ”とも言うべきこの「ハンス・イム・シュノーケロッホ」の由来は以上の通りであるが、ここに一つ問題が残る。私は冒頭に掲げたこの歌の訳で *Schôkeloch* を逐語訳して“かがんぼの穴”とした。これが宿屋の名称、言わば固有名詞であるのに、敢えてそうしたのは、単にフランス語訳をそのまま踏襲したのではなく、それなりの意味を込めたつもりである。

前述したように、かがんぼとは蚊ケ母と表記され、カトンボとも呼ばれる。文字通り蚊に似ているが、体形が大きく、細長い体、羽根、脚をもち、弱々しく飛び、何となく頼りない。この昆虫は血を吸わず、脚がもげ易く、その幼虫の多くは泥穴の中で棲息する。私にはこのかがんぼの穴が、ライン川とヴォージュ山嶺に挟まれ、古くからヨーロッパの二大国家権力の争いにさらされ、苦吟してきたアルザスが連想として重なったのである。そして、ハンスはアルザスという泥穴に生きるかがんぼ的存在ではなかったか、という思いがしたのである。

確かに、このような独断と偏見に満ちた連想は想像力が貧しいと非難されるであろうし、また近代化された風景の中に生きるアルザスの人々に対して失礼かもしれない。しかし、この「ハンス・イム・シュノーケロッホ」の歌をエピグラフに掲げた、F. オッフエの分析したアルザスの現実の苛酷さと、彼の乾いた冷笑の諷諷を思い浮べると、あながち私の類推が当たっていないとは言えないのではないかと思う。

勿論、現在または未来のアルザス人はハンスに己れの姿を見ることを拒むであろう。それはそれで正しい。しかし、何度も言うように、人はその本性を一時的に隠蔽、或いは抑圧できても、それを容易に捨て切れるものではないことも、また確かなのである。F. オッフエの呟きが聞こえてくる。

「アルザスはこれでも、それでもない。アルザスは同時にこれとそれであり、そのうえ、これでもそれでもない何かである。この地方は民族的にはこれで、言語的にはそれであり、風俗的にはこれで、感性的にはそれであり、また心情的にはこれで、精神的にはそれである。¹⁶⁰」

このような矛盾に満ちたアルザスの本質的二重性、「ハンス・イム・シュノーケロッホ」はそれを反映してはいないであろうか。もしこの二重性が完全に消滅するようなことがあるとすれば、ハンスは心おきなくアルザスの舞台からすぐにも退場するであろう。いずれにせよ、「シュノーケロッホのハンス」はアルザス人の本質的な不満、あの唐突で不可思議な態度急変の原因となる、何かしら移ろい易く、不確かなものを見事に表現したものである。行方定まらぬ彼らは自己の所在を永遠に求め続けてきたし、それはまたこれからも続くかもしれない。

3. アルザスという名称の起源

Alsace 或いは Elsass という語は一体どこからきたのであろうか？この起源を確定することは極めて困難である。結論から先に言ってしまうと、これに関する幾つかの説はあるが定説はない。

また一般的に見て、アルザスの地名研究 toponymie は興味深い研究対象であるにも拘らず、Ph. ドランジェ氏が嘆くように、問題を解決するよりも、問題を提起することが多いほどその解釈は微妙である。

例えば、ミシュランの地図ヴォージュ・アルザス篇を聞いて見ると、-willer, -heim, -bach, -bourg などの語尾で終わっている地名が多出する。特に-willer の語尾をもつ地名は低地、高地両アルザスに多数あるが、前記ドランジェ氏によれば、その起源は不明確であるという。その多くは確かにローマ起源だが、ゲルマン起源のもあり、時にはかなり後代の起源のものもある。そのため、ローマ人、ケルト人が特に多かった平原部、ヴォージュ山地、山麓部にはローマ・ケルト起源の地名が百を大きく越えるほどあるのに、どの-willer で終る地名の土地に彼らが居住したか、推定するのは困難であるという。当然のことながら、支配的民族が変われば、地名も変わる。ましてアルザスは有史以前から様々な人種民族の通過路であった。ストラスブールがその典型的な例である。ローマの支配時代 Argentoratum と呼ばれていたこの地が、4～5世紀のアレマン人の侵入とともにゲルマン化されて Strateburg となり、ここから Strasbourg が生じた。(もっとも、この名称の起源と意味にも異説が多くあり、定説はないが、ここでは一つの説として引用する。) 元々ローマ人の野営地の一つであった Argentoratum が、本街道の町 Ville de Grand'rue となったのには相応の歴史の流れがあったのである。本街道上の町とは言えて妙であり、後世の“国家横断的な地方 région trans-nationale”を目指すアルザスはその宿命的役割を、遠くケルト、ローマの時代から胚胎していたのである。

また別な例を挙げれば、クロヴィスの勝利の後、アルザスがフランク王国に併合されてアレマン族がこの地方の北部から南部の方へ去ると、-ingen という語尾の地名はアルザス平原からは殆ど消えて、-heim という語尾に変わった。バーデン地方やスイスに多いこのアレマン語系の -ingen 語尾の地名はアルザス南部のズントガウにしか残らなかった。ここにも後述する時の流れが反映されている。

それでは、アルザスという地名の場合はどうか？以下、最初の系統的アルザス史と言われるジャン・ダニエル・シェプフランの浩瀚な書“*Alsatia illustrata*”(1751-61)の仏訳版(1849-52)と、前出 Ph. ドランジェ氏の見解、ユージェーヌ・フィリップス教授の『1945年までのアルザスの言語闘争』という私の手元にある限りの情報を元に、不十分ではあるが検討して見たい。

時間的順序に従って、まず J. D. シェプフランの説を見ると、彼は冒頭から次のように断じている。

「如何なる時代にも、Alsace という語がわが地方を指さすものとして、ギリシア、ローマの歴史家に使用されたことはない。この語はケルト語にもラテン語にもその語源がない。それはフランコ・チュートン方言 *idiome franco-tudesque* から来ている。¹⁸」

そして聖グレゴワールの『フランク族の歴史』には Alsace の記載はないが、彼の書の短縮者にして註釈者のフレデゲールが、7世紀のダゴベール1世(629-39)の治下に、始めてこ

の語に言及して、その住民を Alesaciones または Alsacii, 地方名を Alsatia と呼んでいるという。更に、フレデゲールが596年に死んだシルドベール2世の遺言状の文そのものを引用しているのだから、この地方の住民は既に6世紀に Alsaciens, Alesaciones の名で知られていたと推測している。次いで、この語に関する幾つかの誤った説を紹介したあと、“より正しい語源”として、以下のように展開する。

5世紀にフランク族がライン沿岸に新たな支配を確立すると、それまで使用されていた住民の名称が、ケルト語のものから、チュートン語またはフランク語のものに変わった。それが Elsass 或いは Elsassier であり、これは前項で述べたイル川 l'Ill 沿岸の住民、イル川付近の国の所有者を意味した。この名称が支配的になったためにラテン語の屈折をもつ Alsaciones は6世紀にしか現れなかった。この語はメロヴィング朝のライン沿岸住民を指している。

古い記念碑 monument にはこの語のラテン語形態がチュートン語形態以前に現れている。然しながら、後者は前者の前には使用されていない。それはチュートン語を母語とするフランク族がこの語を創ったからである。この時代のフランク族の言語を記述しているものは殆どなく、書き言葉としてこれを使い出したのはやっと7世紀になってからである。中世の作家や公証人は時にはラテン語語尾、時にはチュートン語語尾に従った。年代記や公文書に様々な書法が生じたのはこのためであり、この語に関しても、Alsatia, Elisacia, Elisata, Elisaza, Elisatium, Helisatia, Alsecinse, Alsacinde などの表記が生れた。Elsass という語がイル川からきており、中世にはエル Ell 川と呼ばれたのは古くから知られていた。この説は以後も様々な人々によって支持されている。

結局、Elsass という語はケルト語起源ではなく、フランク族の方言に属するものであり、これをラテン語で表記したものが、Alesaciones, Alsatii, Alsatia と綴ったのであるとするのが J. D. シェプランの説である。そして彼はまた Elsass, Elsassier は最初は住民を指したもので、地方名を意味するのはその後であると主張する。それはドイツ語の接尾辞 sass が、国や川を意味するためのものではなく、合成語の Reichsass (帝国民), Landsass (州民) のように、居住者を指すからであるという。

これに対し、J. D. シェプフランより2世紀後の Ph. ドランジェ氏の見解を要約すると次のようなものである。⁽⁹⁸⁾

アルザス公国の創立同様、7世紀の極めて特徴的な事実アルザスという名称の出現である。フレデゲールという年代記作者が、住民を指した Alsaciones を610年、ライン川とヴォージュ山嶺の間の地方を指した Alesacius を613年のものとして、始めて記述したのは625年頃である。この名称の起源に関しては様々な研究がなされ、熱心な議論が交された。しかし今日に至るまで、満足すべき結論は得られていないという。そしてドランジェ氏は言語学者と歴史家の賛同を得ている三つの説を紹介している。

この三つの説を見る前に、公国に昇格したアルザスについて述べておきたい。それはこの地方が始めて政治的統一として公認されたからであり、またアルザスという名称がそのことと何らかの係わりがあると思うからである。

メロヴィング朝フランク王国は創始者クロヴィスの死後(511)、オストラシア(東部)、ネウストリア(西部)の二つの王国に分裂し、弱体化した。特にフランク王国を再統一したダゴベール1世の死後(639)、ゲルマン慣習法によって領土が分割されると、支配力が大きく後退した。この弱体化のお蔭もあって、オストラシア王国に併合されていたアルザスが始め

て公国になったのは640年頃である。それは、それまでメロヴィング王国に属していたアレマン公国が事実上独立化したので、王国の安全確保のためライン川沿岸地域に強力な防衛上の橋頭堡を築くという軍事的目的のためであった。この時のアルザス公国はヴィサンブール地方とベルフォール管区を除く、アルザス全土を擁し、しかも7世紀末になるとベルン・ジュラ山脈とアーレ川とライン川の合流点にまで勢力を伸長した。しかし、この公国は軍事的役割だけでなく、行政的統一体としても機能した。また宗教的には、公国全体がストラスブール司教区に属した。公国は三代目公爵アダルリッックまたはエティションが出るに及んで、その勢力拡大と繁栄をもたらした。この家系は8世紀中頃まで続き、一時途えた後、9世紀初めに再び興隆し、アルザス公国の繁栄を持続したが、10世紀にその男系の血統が消滅した。

前述したように、アルザスという語の初出はフレデゲールの625年で、アルザスの公国昇格前である。それまでは、低地・高地両アルザスにほぼ見合うノールガウ、ズントガウの両伯爵領 Landgrafschaft がこの地方を二分していたと思われる。しかし、この辺境の地 *marche* は分裂したフランク王国の中にあって、ある種の政治的力を持つようになり、Elsass にしろ Alesaciones にしろ、他地方の住民と区別して認知するためにそうした弁別的名称が必要となったのではないだろうか？あくまで推測の域を出ないが、そうでなければ、ダゴベール1世の死の直後、軍事的理由からだけでいきなり公国が形成されるはずもなく、また半世紀近い空白があるとはいえ、この戦乱の地に2世紀も政治的統一体としての公国が存続することは困難ではないだろうか？物ごとくに何らかの名称が付与されるのは、それに対応する何らかの実体があるはずである。従って、7世紀前後にアルザスという語が現れるのはそれなりの歴史的、政治的、社会的な背景があったのであろう。

さて、ドランジェ氏の言う三つの説に戻ろう。その第一の説は一般的によく認められたもので、Alsace をゲルマン語の *ali* (他の、別の)、と *-saz* (居住した) の合成語とみなすものである。従って、アルザス人とは外部、外国に住む人々という意味になる。ルイ14世以来、かなりの時期までこの地方は事実上外国とみなされていたことを想起すべきである！かつてこの名称はライン対岸に残ったアレマン族が、フランク族の支配下に入った同族を指して言ったものだと考えられていた。しかし、今日ではこの語はフランク族起源であり、彼らがアレマン族の住む地域に少数住む同族を指して用いたとする傾向にある。そしてそれが全住民とこの地方そのものに当てられるようになった。この説は文献学的には正しいようでも、やはり奇妙で不自然であり、説得力に欠ける。

第二の説は、Alsace をケルト語起源とするものだが、これは議論するまでもなく根拠のない仮説である。第一この説は遙か遠い過去まで遡ることを前提とするが、もしそうだとすれば、その後にアルザスに入ってきたカエサルも、古代の如何なる地理学者もそれに言及していないのは不思議である。

第三の説はアルザスを「イル川の国」とするものである。これは最も古く、最も単純で、もっともらしい説だが、言語学者はこれを絶対認めないという。この名はストラスブール南部の通称 *Elsau* や、イル川の水源地の西にあって、7世紀から言及されている *Elsgau* という似たような地名もあるが、この語の形成、発展過程については何も分らない。因みに、有史以前のアルザスの河川交通の役割を担ったのは、ライン川ではなくイル川であった。

以上がドランジェ氏の見解である。この三番目の説はシェプフランのものと同じだが、言語学者がきっぱりと否定するというのは何故であろうか？残念ながら、私の手元にはこの疑

問を直接解くような判断材料が今のところない。但し、シェップフランの言うフランコ・チュートン方言 *idiome franco-tudesque* 起源説と、ドランジェ氏の第二の見解のフランク語起源説については若干考えて見たい。

E. フィリップス教授の前掲書によれば、⁽²⁰⁾ ローマ帝国を瓦解させた4～5世紀のゲルマン民族の大移動で、アルザスに侵入したのはアレマン族であった。当然彼らは時のアルザス支配者ローマ人、また北ガリアを征服して南進してきたフランク族と衝突した。長い戦闘の後、結局フランク族が勝利を収めた。その結果、フランク族がアルザス北部に定着し、先住のアレマン族を南部に追いやることになった。そしてこれが言語上アルザスにとって極めて重要な事態を出来させた。というのは、この時以来、つまり1500年近く前から、概ねアグノーの森の北部ではフランク族の言語であるフランク語、アルザスの他地方ではアレマン族の言語であるアレマン語が話されるようになった。この二つのゲルマン語方言 *dialecte* は時には著しい相違を示すが、交流ができる程度には接近している。従って、5世紀からアルザスは後に言うドイツ言語語圏に属していたことになる。但し、今日のドイツ語とフランス語の言語境界線が5世紀に始まったと考えてはならない。それにアルザス方言の分布域は複雑である。フィリップス氏はR. マッツェンのアルザス方言分類を引用して注意を促している。

地方、区域、個人などの多様な変化を捨象すると、アルザス方言には、北から南にかけて、概ね三つの、しかも極めて不均衡な次元の方言域がある。

一第一はライン・フランク語 *le francique rhénan*=*Rhein fränkisch* で、これはゼルトツバッハの北部とヴォージュの北西部で話されており、プファルツ地方やドイツ語系ロレーヌ地方のものと同一か、または類似した方言 *dialecte* である。

一第二は低地アレマン語 *le bas-alémanique*=*Niederalemannisch* で、これはアルザスの大部分、低地ヴォージュの東縁部からベルフォールの谷まで話されている。

一第三は高地アレマン語 *le haut-alémanique*=*Oberalemannisch* で、これはズントガウの南東部周辺で話されており、⁽²¹⁾ スイスの俚語 *parler* にごく近い方言の変種である。」

アルザスの多彩な歴史的変遷、住民が蒙った有為転変を考えただけでも、この方言域が1500年も固定したものなどとは誰も考えないであろう。私が注目したいのは、5世紀後半から6世紀にかけてフランク族がアルザスに定着した後も、アレマン族はアルザス南部を中心に残留していたことである。それに、ドランジェ氏によれば、この二つのゲルマン部族がアルザスにどのような寄与したか、判別することは困難である。考古学上の発見からしてもアレマン族の墓とフランク族の墓が並列して残っているという。またこの頃アルザス全土に生じたケルト、ロマン語からゲルマン方言への交替にもヴィレ、リプーブル、ラプトロワの三つのヴォージュ溪谷は含まれなかったという例外もある。そこには先住民族のガロ・ロマン語が残ったのである。現実には人が動き、言葉も動くのであれば、均一の言語的变化が短期間に起り得ないのは、これまた当然であろう。

ところで、シェップフランは *franco-tudesque* という語を用いているが、これはどう解釈すべきであろうか？ヴァルター・フォン・ヴァルトブルグの『フランス語の進化と構造』にも、*franco-provençal*, *franco-picard* などの用語がでてくるが、例えばフランコ・ピカル語は「基礎はパリのフランス語だが、強度にピカル語法が混入している書記言語」⁽²²⁾ のことだとある。また、E. フィリップス氏によれば、⁽²³⁾ チュートン語とは、ライン・フ

ランク語のことで、おそらく当時アルザス北部で話されていたものかなり近い方言のことである。従って、ヴァルトブルグの用いた franco- とシェップランの用いた franco- とは意味が違ふと思われる。但し、後者の場合は原著のほぼ一世紀後に、ルイ・ヴァルドマー・ラヴネによって仏訳されたものであり、私にはその原語を調べる術が残念ながらない。一般にフランス語では、franco- は「フランスの」という意味であり、「フランク(族)の」を意味する語は franc である。

ともあれ、乏しい情報量に自らの非力が合わさって、結論を出すべくもないが、次のような程度の推論はできよう。

つまり、シェップランの franco-tudesque が何を意味するものであれ、ドランジェ氏のフランク語起源説に対する疑義が正当であれ、フィリップス教授の論述の如く、同じゲルマン民族のアレマン族が南部に残っていたとしても、この時の支配民族はフランク族である。確かに、ヴォージュの向うでは、支配者フランク族の言語であるサリイ・フランク語 le francique salien がガロ・ロンマ語と接触、混淆していたであろうが、アルザスの地では一部の地域を除いて、ゲルマン語方言だけが話されていた。その支配的言語がライン・フランク語だったのである。なるほどアルザスにはアレマン族やガロ・ロマン系民族が残っていたかもしれないが、被支配者は表面的にでも支配者に従い、その言語を媒介語にしたことは十分あり得ることである。小国アルザスは、このようにして、古き時代から今日に至るまで、支配者が変わる度に言語も取り替えさせられてきた！従って、Alsace という語がこの頃、即ちメロヴィング朝のある時期に生じたという仮説を前提にする限りでは、この語がフランク語起源であることにはそれなりの妥当性があるものと思われる。

しかし、支配部族の言語が優勢であるのは当然としても、この語の誕生に、同じゲルマン語方言のアレマン語、またアレマン、フランク両部族のアルザス占拠、定着後もしぶとく残っていたガロ・ロマン系先住民の言語が全く関与しなかったとも言い切れない。J. リテールによれば、²⁴⁾ 5世紀にアルザスはアレマン族の手に落ちたが、彼らはまず平原部に居住し、この地域で急速なゲルマン化が進められた。次いでヴォージュ溪谷、ズントガウに浸透したが、ここではガロ・ロマンの影響が長く残った。それでもアレマン族の数と勢力は、自らの言語をアルザス住民に課するに十分足りた。そして以後、この地方は前述の方言域の多様性は別としても、概ねアレマン言語圏に属するのである。このアレマン言語圏は南西ドイツのバーデン、シュバルツバルト(黒い森)、コンスタンツ湖、スイス・アレマン地域を含む。だから、アルザスはヴォージュ山嶺やブルゴーニュの向うのロマン語諸国とだけでなく、中期フランク語 le francique moyen 圏に属するロレーヌのドイツ語系地域やプファルツ地方とも異なる。一方、フランク族が勝利の後占拠したヴィサンブール国 pays やランドー地方は、カールスルーエやフランケン地方でも話されている上期フランク語 le francique supérieur に属している。このように前述した E. フィリップス、R. マッツエン氏の言語分布図とは若干ニュアンスを異にして、J. リテール氏はアレマン語の言語的優越性を主張する。しかしまた、地名研究 toponymie からすると、フランク人の占拠人口が多かったことも事実である。その証左として、軍事上の目的からの入植と、メロヴィング朝時代に各地の大修道院が企てた土地開墾は、フランク族の入植者が主力であったことが挙げられる。

他方、ゲルマン民族のアルザスへの入植はガリアの他の地方よりも著しく密度が高く、ま

た前述したように古代墓地の大きさから、アレマン、フランク両部族が平原部の幾つかの地域に多数居住していたことも事実だが、今に残るラテン語起源の地名はガロ・ロマンの影響が根強く残ったことを示すものである。この影響は数多くの地点、中でも低地ヴォージュ地域に著しく、この地におけるぶどう栽培の発展がそれをはっきりと物語るものであるという。ぶどうの導入は2世紀から3世紀半ばの頃とされている。

J. リテール氏はこのようにアルザスにおけるローマ人の存在が大きかったことを指摘している。紀元前58年のカエサル²⁵の勝利から、4世紀から5世紀にかけてのゲルマン民族のアルザスへの大侵攻、定住までの500年間のローマ支配時代は、ライン川流域のローマ化された諸国同様、帝国外の諸地方よりもアルザスを大きく前進させたという。確かに、5世紀間のラテン民族支配が残したものが、建物や記念碑はともかく、定着した文化や伝統が一朝にして灰燼に帰することなどあり得ない。まして一民族の言語が一夜のうちに他の言語へと転換することなど不可能事である。それは数世代を経て後、なおある一定の条件がないと起り得ないことである。E. フィリプス氏が言うように、「ある言語上の変化は、元の言語の影響が何らかの形で新しい言語において感知されることなしに起るのは稀である」からである。

以上見てきたように、Alsace という語のフランク語起源説はそれなりの言語学的根拠を持つが、この方言と近縁のアレマン方言、また先住民族のガロ・ロマン語との係わりも当然あり得るものと考えられる。ところが、5世紀から7世紀頃にかけて、アルザスにおける言語がライン・フランク語を支配言語としつつ、同族のアレマン語や残存するガロ・ロマン語をどのように駆逐し、または同化、混淆を繰り返して行ったか、不明なままである。ヴォージュの向うのサリイ系フランク族は、いつの時代かこれも不明だが、自らの言語を話すことを止め、自らが征服したガロ・ロマン人の言語に同化されてしまった。だから、ストラスブールの誓約(842)はロマン語 *romana lingua* とチュートン語 *teudisca lingua* という相異った言語で交わされることになったのである。このような言語上の分岐、発展に至る過程がメロヴィング朝フランク王国の辺境の地 *une marche franque* にどのように影響したのであろうか？これも分らない。何しろこの頃に関して書き残されたものは殆どなく、様々な歴史的事実の時代を特定することさえ往々にして困難なのである。

従って、Alsace という語の起源に関しては、シェップフランの断定は避けて、ドランジェ氏の今のところ満足すべき解答はないとする結論が一番無難であろう。私としては、シェップフランの言う *idiome franco-tudesque* の *franco* とは *gallo-romain* を意味したのではなかったかと、せいぜい何の根拠もない夢想をするばかりである。このヨーロッパ大陸の小さな一地方は、ケルト、ローマの古代からつい数十年前まで歴史の激動の波にもまれながら、フランスからは勿論、ドイツからさえもしばしば単なる軍事上の要衝としてしか見られず、言わば辺境の地としてしか見られなかったのは、考えて見れば不思議なことである。これもアルザス人の出自の複雑さ、その言語や宗教の特異な二重性からくるのであろうか？蓋し、アルザスという名称の起源など些事中の些事なのであろう。しかし、この語の起源を探究することはアルザス人の出自を考える上において、一定の役割を果たすものと思われる。

註

- (1) Jean Ritter, *L'Alsace*, Que sais-je? (P. U. F), p. 100
- (2) 田中克彦『ことばと国家』, 岩波書店, p. 121~128
- (3) Frédéric Hoffet: *Psychanalyse de l'Alsace*, (Ed. Flammarion), (拙訳『アルザス文化論』(みすず書房)として昭和62年春刊行予定.) p. 48
- (4) Philippe Dollinger 篇: *Histoire de l'Alsace*, (Ed. Privat), P. 55 (Jean-Jacques Hatt 氏担当)
- (5) Ph. Dollinger, op. cit., p. 282. 1648年のヴェストファーレン条約で, アルザスとロレーヌの一部がフランスに併合されたが, 中世から, 言わば, 小共和国として強力な特権的地位を保持してきたストラスブールは, この条約以後も, それを持続していた。しかし, 1681年に開城を余儀なくされ, 太陽王の軍門に下った。因みに, ラインを境に正式に独仏の国境が画定されたのは, アウクスブルク同盟戦争を終結させたリュスビック条約(1697)である。(この頂の執筆担当 Georges Livet 氏による)
- (6) F. Hoffet, op. cit., p. 232
- (7) J. Ritter, op. cit., p. 99
- (8) ミシュランのガイドブックによれば, このお守り porte-bonheur とされる鳥は, アルザスの地方生活では伝統的な位置を占め, 大切にされる。毎年春になると, アルザスの人々は我々日本人が燕を迎えるように, いやそれ以上にこの吉兆の鳥を待ちわびるという。今世紀初頭から減り出したが, 特に1961年からは, 西アフリカの越冬先で大量に狩猟捕獲されたために激減し出した。アルザスに戻ってくるこのとりはヨーロッパ大陸の4万~5万の番いのうちごく僅かを占めるにすぎない。西ヨーロッパで調査された300羽の番いのうち, 1984年アルザスで確認されたのは僅か17羽であった。(Guide de Michelin, *Alsace et Lorraine Vosges*, p. 27)
- (9) Ph. Dollinger, op. cit., p. 490 (Fernand L'Huillier 氏担当)
- (10) F. Hoffet: *Psychanalyse de l'Alsace*, 2^e edition, (Alsatia, Colmar), p. 25
- (11) Jean-Baptiste Weckerlin: *Chansons Populaires d'Alsace*, présentées par Georges Klein et Richard Schneider (Ed. J. P. Gyss), p. 46, p. 206
- (12) Eros Vicari: *L'Histoire de la Littérature en Alsace*, (Ed. de la Nuée-Bleue), p. 80
- (13) 例えば, 浩瀚なハンス・ユルゲン・ゲールツ『ドイツ文学の歴史』(中村英雄他訳, 朝日出版社)では, 僅か一行だけ間接的言及(p. 543)があるだけである。それはアルザスという特異な地域或いはアルザス人が, ドイツ側からも如何に無視されているか, その雄弁な証拠になろう。フランス側からの冷淡な無関心については, 何をか況やである。
- (14) E. Vicari, op. cit., p. 123
- (15) F. Hoffet, op. cit., p. 51~55
- (16) F. Hoffet, op. cit., p. 27
- (17) Ph. Dollinger, op. cit., p. 58
- (18) Jean-Daniel Schoepflin: *L'Alsace illustrée*, traduction de Louis-Waldemar Ravenez (Ed. du Palais royal), t. I., p. 81~86.
- (19) Ph. Dollinger, op. cit., p. 61~62.
- (20) Eugène Philipps: *Les luttes linguistiques en Alsace jusqu'en 1945* (S. E. de la Basse- Alsace), p. 14

- (21) E. Philipps, op. cit., p. 257
- (22) ヴァルター・フォン・ヴァルトブルク, 『フランス語の進化と構造』(田島宏他訳), 白水社, p. 96
- (23) E. Philipps, op. cit., p. 263
- (24) J. Ritter, op. cit., p. 23~24
- (25) E. Philipps, op. cit., p. 259